

令和2年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について — 更なる授業改善を目指して (第5報) —

崇城大学FD委員会 大嶋 康裕*¹ 長濱 一弘*² 内丸 恵一*³ 山路 隆文*⁴ 編著
渡辺 武憲*⁵ 百崎 邦彦*⁶ 岩崎 敏也*⁷ 藤原 大樹*⁸ 八田 泰三*⁹ 内田 貴久*¹⁰
井本 修平*¹¹ マーク ハワース*¹² 今井 亮佑*¹³

Lectures of the “Best Teaching Award” Winners 2020 — Idea for Improvement (5th Report) —

by

Written and Edited by Yasuhiro OHSHIMA*¹, Kazuhiro NAGAHAMA*²,
Keiichi UCHIMARU*³, Takafumi YAMAJI*⁴,
Faculty Development Committee, Sojo University
Takenori WATANABE*⁵, Kunihiko MOMOSAKI*⁶, Toshiya IWASAKI*⁷,
Hiroki FUJIWARA*⁸, Taizo HATTA*⁹, Takahisa UCHIDA*¹⁰, Shuhei IMOTO*¹¹,
Mark HOWARTH*¹² and Ryosuke IMAI*¹³

要 旨

2020年のCOVID-19の流行により、日本国内の大学でも対面授業に代えて遠隔授業を実施することとなった。崇城大学においては、学生の通信環境を考慮し非同期的なオンデマンド型方式による遠隔授業を原則とし、前期においても感染症対策を行いつつ対面授業を一部で再開した。後期には、遠隔授業と対面授業の組み合わせを含めて授業形態を7種類に分類して、科目の特性に応じて各授業が実施された。今年度はベストティーチング賞(BTA)の新たな試みとして、遠隔授業についての表彰区分を設けた。「授業に関する学生アンケート」のスコアと各受賞教員へ実施したアンケート回答を比較して、授業構築の特徴を分析した。

BTA対象授業では対面授業か遠隔授業かの授業形態によらず、学生へのフィードバックに注力した事例が多く見られた。感染症拡大を避けるため取りうる教育技法に厳しい制約を受けながらも、教授者は様々な工夫により授業を実施していった。

Key Words : 授業改善、FD、授業評価、ベストティーチング賞、遠隔授業

*1 崇城大学 総合教育センター准教授
*2 崇城大学 生物生命学部応用微生物工学科教授
*3 崇城大学 工学部建築学科准教授
*4 崇城大学 情報学部情報学科教授
*5 崇城大学 工学部宇宙航空システム工学科教授
*6 崇城大学 工学部宇宙航空システム工学科講師
*7 崇城大学 工学部宇宙航空システム工学科教授

*8 崇城大学 総合教育センター准教授
*9 崇城大学 工学部ナノサイエンス学科教授
*10 崇城大学 工学部建築学科助教
*11 崇城大学 薬学部薬学科准教授
*12 崇城大学 総合教育センターSILC講師
*13 崇城大学 総合教育センター教授
All authors are equally contributed

表-1 令和2年度BTA受賞教員と授業についての基本情報

表彰区分	学年	教職員	授業科目名	受講対象	履修者数	分野	必修／選択	回答率	授業形態
履修者 20～29名	1年	渡辺 武憲	航空運輸概論II	(1操)	23	専門教育	選択	100%	対面
	2年	百崎 邦彦	応用熱力学	(2操)	28	専門教育	選択	100%	対面
	3年以上	岩崎 敏也	特殊航空機概論	(3整)	25	専門教育	選択	100%	対面
履修者 30～79名	1年	藤原 大樹	健康スポーツ教育II	(1美デ業)	39	基礎教育	必修	94.9%	対面
	2年	八田 泰三	有機化学	(2ナ)	54	専門教育	必修	94.4%	オンデマンド
	3年以上	内田 貴久	建築意匠設計	(3建)	39	専門教育	選択	97.4%	対面
履修者80名以上		井本 修平	有機化学II	(1業)	131	専門教育	必修	94.7%	ブレンド型
SILC		マーク ハワース	イングリッシュ コミュニケーションIII	(2ナ)	28	基礎教育	必修	100%	同時双方向
遠隔授業 前期		大嶋 康裕	工学・情報系の基礎数理I	(1建情)	49	基礎教育	必修	93.9%	オンデマンド
遠隔授業 後期		今井 亮佑	政治学I	(3機ナ建 宇情微生)	68	基礎教育	選択必修	72.1%	オンデマンド

表-2 BTA受賞教員の授業に対する学生による授業アンケート結果

教員名	授業名	質問項目のスコア											受賞者の 平均値	全体 平均比較
		第5項	第6項	第7項	第8項	第9項	第10項	第11項	第12項	第13項	第14項	第15項		
渡辺 武憲	航空運輸概論II	4.87	4.65	4.87	4.61	4.78	4.48	4.61	4.70	4.95	4.83	4.70	4.73	1.11
百崎 邦彦	応用熱力学	4.72	4.67	4.80	4.77	4.80	4.53	4.80	4.90	4.87	4.70	4.83	4.76	1.12
岩崎 敏也	特殊航空機概論	4.08	4.00	3.92	4.20	4.24	4.40	4.44	4.36	4.48	4.04	4.12	4.21	1.01
藤原 大樹	健康スポーツ教育II	4.62	4.73	4.67	4.43	4.57	4.43	4.49	4.78	4.76	4.73	4.70	4.63	1.09
八田 泰三	有機化学	4.33	4.24	4.35	4.06	4.29	4.30	4.44	4.46	4.61	4.36	4.49	4.36	1.04
内田 貴久	建築意匠設計	4.50	4.41	4.58	4.26	4.53	4.55	4.57	4.61	4.63	4.34	4.29	4.48	1.06
井本 修平	有機化学II	4.51	4.20	4.31	4.58	4.55	4.37	4.59	4.61	4.70	4.55	4.18	4.47	1.06
マーク ハワース	イングリッシュ コミュニケーションIII	4.59	4.54	4.57	4.43	4.79	4.37	4.50	4.57	4.89	4.75	4.61	4.60	1.12
受賞者の各項目の平均		4.53	4.43	4.51	4.42	4.57	4.43	4.55	4.62	4.74	4.54	4.49		

1. はじめに

崇城大学において令和2年度に施された「授業に関する学生アンケート」で定量的に高い評価を受けた教員8名および定性的に高い評価を受けた教員2名が、10種類の授業に対してベストティーチング賞（BTA）を受賞した。このBTA受賞教員と授業科目に関する基本情報を表-1に示す。平成30年度より、「授業に関する学生アンケート」の実施形態が変更され、学生がアンケートに記載するにあたり、まず、ポートフォリオで学生が授業を受けた前後での自身の成長を振り返ることが課せられた。またこのシステムは専用のWebシステムである「SOJOポートフォリオ」を利用し、従来の紙媒体を用いた授業時間内における短時間記入に比べ、入力期間を複数週設定しており各授業について時間的余裕を持って記入できるように改良されている。

2. 「授業に関する学生アンケート」について

詳細は後述するが、令和2年度においては崇城大学においても遠隔授業を多く実施することとなった。これを受けて、FD委員会は令和2年度のBTAの受賞区分について遠隔授業に特化したものを新設した。これは、遠隔授業について特筆すべき取り組みを行なっている授業を、FD委員のワーキンググループがアンケートの自由記載欄の履修学生の回答をもとに、前期1授業、後期1授業を選定したものである。今年度は各1名、合計2名の受賞者が選定された。なお、選定された前期1授業の担当教員がFD委員を担当しているが、その教員は選定には関与していない。

8名の受賞者の授業に対する学生によるアンケートの結果を表-2に示した。アンケートの質問項目は、I. 学生自身の授業への取り組み II. 授業内容 III. 教員との対話 IV. 授業方

法、の4つの区分からなる。このうち、IIからIV、すなわち、以下に示した第5項から第15項の11個の質問項目がBTA受賞者を決定する際に反映される評価対象である。学生は各質問項目に対して3または5段階の数値を選択して回答している。5が質問に対する最も肯定的な評価である。なお、遠隔授業の受賞者は自由記載欄のコメント回答により選定されているため、表には含めない。

【II. 授業内容について】

(第5項) この授業内容の満足度はいかがですか。

(第6項) この授業内容を理解できましたか。

(第7項) この授業を受けてその内容についての興味や関心が高まりましたか。

【III. 先生との対話について】

(第8項) 先生の授業の中や授業外で学生の質問や発言などを促しましたか。

(第9項) 学生の質問や発言に対して先生の対応はどうでしたか。

【IV. 先生の授業方法について】

(第10項) シラバスの説明がありましたか。

(第11項) 授業に使用した教材や宿題は授業内容を理解するのに役立ちましたか。

(第12項) 先生の話し方は聞き取りやすかったですか。

(第13項) 授業に対する先生の熱意や意欲を感じましたか。

(第14項) 授業中の勉強する雰囲気は良かったですか。

(第15項) 授業の進む速さと量はあなたにとって適切だったですか。

3. COVID-19の流行による令和2年度の授業実施への影響

1) 授業実施への影響要因

崇城大学においては令和2年度の前期については、5月上旬にオリエンテーションを経て授業開始で原則オンデマンド型の遠隔授業を行う方針とした。この決定に至るまでの、遠隔授業に関する崇城大学とその周辺環境について振り返る。

返る。

考慮すべき項目は複数あった。日本の大学全体に及ぶものは、大学設置基準、著作権法の2点である。崇城大学固有の問題は、大学のICTインフラが遠隔授業に耐えうるか否かの判断、遠隔授業をどの方法で学生に提供するか、履修者が授業の各コマの受講時に何をすべきか迷わない統一的な授業の流れの提示方法の2点である。

2) 大学設置基準第32条第5項

2020年3月中旬の段階において、COVID-19の感染拡大が日本の大学の授業開始時期や授業形態に及ぼす影響を国立大学間連携で調査する動きが見られた¹⁾。また、3月24日には、遠隔授業に関して、大学設置基準第32条第5項による上限60単位についての緩和に関する文部科学省からの通知²⁾が出ている。

3) 授業目的公衆送信補償金制度

この通知のみで遠隔授業ができるようになったかということ、現実的には不可能な場合が多かった。あわせて遠隔授業の実施のために考慮しなくてはいけなかったのは、著作権法35条の公衆配信に関わる「授業目的公衆送信補償金制度」³⁾が、2020年2月末時点では開始していなかったことである。

平成30年度の著作権法の改正以前は、学校においては、対面授業と、遠隔合同授業という対面授業を遠隔地の会場に同時配信するものについてのみ、無許諾かつ無償で著作物を使用できてきた。それ以外の授業形態、つまりオンデマンド型授業や、遠隔地の会場に対する配信のみで対面授業無しの場合は、著作物の利用に関して全て許諾をとる必要があった。

これが平成30年度の著作権法の改正により、文化庁の指定管理団体である「授業目的公衆送信補償金等管理協会（SARTRAS）」に対して補償金を支払うことで、有償ではあるが「無許諾」で、オンデマンド型授業や同時双方向型授業において著作物を利用できるように制度が準備され、開始を待つところであった。

ところが、2020年3月上旬になっても制度が

開始されなかったため、文化庁から著作権等管理事業者及び関係団体へ「格別のご配慮」をお願いする事務連絡⁴⁾が出ることとなった。これにより、まだどのような手順でどの機関がSARTRASへ直接払うのか、その金額の算出方法が公開されていなかったものの、近いうちに制度は開始されるだろうという見込みのもとに実施すべき授業形態を検討することができるようになった。制度については、令和2年度においては無償と決定され、2020年4月28日に制度は開始された⁵⁾。

4) 崇城大学のICT環境の遠隔授業対応

遠隔授業での授業実施を検討するため、崇城大学は2020年4月に、授業技術検討WGを設置した。そのWGでは大学全体で授業を実施することが可能な技術的手段を、性能とともに検討していった。

並行して日本国内では、リモートワークの推進や初等中等教育での同時双方向型遠隔授業が開始され、日本国内の固定通信及び移動通信の帯域逼迫状況を考慮し、「データダイエットへの協力をお願い：遠隔授業を主催される先生方へ」⁶⁾が出される状況であった。ここでは、同時双方向型よりもオンデマンド型の授業形態を推奨されている。

結論は、授業動画はMicrosoft Stream、資料はMicrosoft OneDriveから配信することとし、帯域逼迫を引き起こしかねないトラフィックをキャンパスネットワークの中に流さない方式とした。また、履修学生が授業動画や資料へのアクセスを容易となるよう、崇城大学の標準的に使用している学習管理システム(LMS)であるWebClassに、URL情報などを集約して掲載することとした。

5) 遠隔授業受講方法の学生への伝達

特に新生生については、崇城大学のICT環境は未知のシステムであり、その上にそれらを利用して、多数の授業を毎日複数受講しなければならない状況が待っていた。

授業開始までに、学内教職員の努力により新生生のICT環境の利用法についての教育を終え

ることができた。

5月から開始したオンデマンド型の遠隔授業については、履修学生側からみて、LMS上で提供される教材をどのように活用して学修していけば良いかの手順書を作るべきだ、ということになった。これが、全ての遠隔授業でLMS上に毎回掲載することになった「授業の流れ」である。実際にBTA受賞者が掲載したものを例として図-1に示す。

項目	内容
科目	工学・情報系の基礎数理I①◎(1建情)
授業回	07
担当教員	大嶋康裕
連絡先	yohshima@ed.sojo-u.ac.jp
授業の流れ	<ol style="list-style-type: none"> (5分程度) WebClassの授業07回の「ダウンロード資料07」に記載された資料をダウンロードするために、リンクをクリックしてOffice365にログインしてダウンロードする。できなければページに書いてある指示に従うこと。 (20分程度) 第II章「指数関数の微分法」および「対数関数の微分法」(p61-p65)を眺める。 (40分程度) 上と同時でもよいが、授業動画07-1を視聴する。ノートに書き写す場合は動画を止めながら聞くとよい。 (20分程度) 教科書で本日扱った範囲の例題や上記授業動画を参考に、問8-1、問9-1を解く。 (5分程度) 課題07-1の理解度確認クイズに解答する。結果に満足できなかった場合などは、出席07実施後でも、できるだけ早いタイミングで再挑戦し、高い点数を目指す。 <p>なお、ノートパソコンなどで動画を視聴している場合、再生画面右下の歯車マークを押して再生速度を変更できるので、理解が十分だったところは高速再生をして先に進んで良いです。</p>
提出物等	課題07-1で指定されたURLで理解度確認クイズに解答する。できるだけ高い点数の獲得を目指すこと。
出席確認	授業の流れを終え、出席07を実施する。 出席の文章量について：授業が週2回であるので多く書かなくて良い。
宿題等	今週より、数回に1回、提出課題を課すことにする。手書きノートやレポート用紙を写真に撮りPDFファイル化する方法を下記など参考に練習しておくこと。(授業の流れの中で「今回は提出を求めないが」と指定してある問題について、一定の授業回数進行後、課題として写真のPDFファイル提出を求めることもある。) レポート提出の際に写真のPDF化の方法を知りたい人は、この授業のコース内にある、サブチャンネル動画「紙に書いたレポートをPDFファイル化する手順」を見ておいてください。

図-1 授業の流れのサンプル

4. BTA受賞教員の授業への取り組みについてのアンケート調査結果

令和2年度BTA受賞教員10名に対して、各教員がどのように授業を構築したのかを明らかにするためにアンケートと、必要に応じて追加のヒアリングを実施した。アンケートで記載をお願いした内容と得られた回答を示す。

依頼したアンケート項目

1. 授業の概要
2. 授業で気をつけていること・工夫したこと
たとえば、次の1～3の取り組みの中で該当する項目があればご記入ください。また、1～3以外の取り組みをされておられたら、是非ご回答ください。
 - 1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み
 - 2) 学生の理解度を高めるための取り組み
 - 3) 学生の質問や発言を促すための取り組み
 - 4) 独自の取り組み（1～3以外）
3. 授業改善に向けた提言

以下、10教員のアンケート回答を示す。

以下の教員1については、FD委員が担当教員に直接ヒアリングを行いアンケート項目に合わせて文章を構成したものを示す。

1) 担当教員 渡辺 武憲
科目名 航空運輸概論Ⅱ

1. 授業の概要

本学の航空操縦学専攻では、大学における4年間で1年半は池田キャンパス、続く2年半では空港キャンパスにおいて大学の正規の教員が、学生の成長を長期的視点で見ながら、各個人の適性や個性を生かしつつ育成している。訓練効率を優先した従来のパイロット訓練とは異なる、新たな大学教育としてのパイロット養成のあり方を、本専攻では切り開いている。

「航空運輸概論Ⅱ」にて取り扱う航空産業は国家や社会の重要なインフラであり、経済交流・社会文化交流の橋渡しをする極めて大事な産業と位置付けられる。特に資源の乏しい我が国にあっては、外国との円滑な交流は21世紀を生き残っていくために必須と言える。この広範な交流を支える航空に関連する基礎知識の習得、航空業界の抱える課題への理解、そしてエアラインの日々の活動を知ることが目的とする。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

本学では「学生の心に火をつける」ための教育を行なっているが、この言葉を借りるならば本専攻へ入学してくる学生は既にパイロットになるための職種へのこだわりを持つ「学生の心に火がついた」状態である。

この火を消さないよう、具体的なエピソードを交えて説明し、経験講話として航空産業で働く方々からの講話の機会なども（オンライン会議システムも利用して）設けている。

空港キャンパスでの2年半の訓練は、座学のみだった学生たちにとって厳しいものとなる。訓練と勉強は、パッケージにならないとなかなか定着しない。フライト中に使えない知識ではいけないと気づかせ、合わせて、パイロットとなる自分を律して、皆から支えられていることへ感謝する心をどう作るか。優れた専門家である一方、社会人・組織人として健全な判断ができる人こそエアラインが安全運航を託すにふさわしいパイロット像である。

3. 授業改善に向けた提言

40年を企業人として過ごしてきた者にとって、教育それも最高学府である大学で教鞭をとる巡りあわせに戸惑いがあったことは事実である。組織の在り方や運営は、長年培われてきた風土、伝統によって違うのは当然のこととして頭では認識していたが、実際の局面で受け入れるのは大変であった。しかし、一つだけ大きなことを学んだ。それは学生の心に火をともしれば、思いもよらないほど大きく成長する若者がいることだった。人を育てる難しさ、楽しさを教えてくれた崇城大学に心からの感謝を述べてベストティーチング賞の御礼といたします。

2) 担当教員 百崎 邦彦
科目名 応用熱力学

1. 授業の概要

操縦学専攻の学生に対し、パイロットとして航空機を運航するために必要な航空気象の知識を定着させることを目的に、2年生前期に航空気象学Ⅰ及びⅡとして航空気象の基礎と気象庁

から提供される各種気象資料についてオンデマンド型の遠隔授業で実施した。応用熱力学は、大気の循環に伴い発生する日本の四季の気象現象に焦点をあて、空港キャンパスで対面授業により実施した。授業は、概要等の回を除き計12回の授業をグループ学習とし、3回の授業を1セットとして春夏秋冬計4セットを実施した。学生を6名程度のグループに分け、各セットは、1回目に講義及び検討項目の決定を実施、2回目に討論、発表資料作成、3回目に発表、講評とした。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) 前期に、航空気象学Ⅰ及びⅡを実施しているものの、オンデマンドであったことから、本授業の中で理解度の確認を行い、必要に応じて前期オンデマンド教材の再確認（Teamsに掲示）を促しながら、基礎として得た知識が本授業の内容と結びついていることを認識させるように実施した。
- 2) 5グループが実施する討論を巡回し、検討の不足や、航空機の運航に重要な気象現象等のヒントを与えることにより、知識を整理するよう促した。
- 3) 4回の討論、発表について毎回リーダー、書記、発表者等の役割を交代させ、全員が役割をもってグループの検討に参加するように配慮した。また、討論状況の巡回時に新たな質問を投げかけ、より広い範囲に目を向けさせるようにした。
- 4) 自分で学ぶことが重要と考え、討論での発言が少ない学生に着目した。話の輪に入れない学生が話しやすくなるようにヒントを与えて、考えることを促すことが重要であると思います。

3. 授業改善に向けた提言

私の授業は、航空気象学として見ると、オンデマンド授業から引き続き実施する対面授業です。オンデマンドで実施した内容を含めて、対面授業の中で理解度を確認し、前期資料の再確認を促し、定着させるように実施しました。四季の気象は本授業で初めて学習しますが、前期

のオンデマンド授業の範囲を自分のものとしたうえで授業を進めることが大切であると認識させるように努めました。定着には反復して学習する環境が大切であると思います。特に、いつでも前期の資料（基礎的事項）をTeams上で再確認できることが対面授業の質を上げていると思います。

3) 担当教員 岩崎 敏也

科目名 特殊航空機概論

1. 授業の概要

本授業は、二等航空整備士資格取得を目指す航空整備学専攻に所属する3年生が、受験する技能審査（試験）の受験科目の一つである「航空法」に関わる授業である。よって技能審査の合格に必要な知識を習得させることを第一の目的とする。また試験対策とは別に、関連知識等を教授することによって、学生の興味関心を高めることも考慮した。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) この授業は、技能審査の航空法の科目の対策の授業である。法令についての試験であるため理数系的な要素はなく、「暗記」中心になる。しかしただの丸暗記では、技能審査後に何も知識が残らない。技能審査後にも少しでも航空法についての知識が残るようにするため、なぜそうなるという視点に立って説明するように心がけた。

例えば、「航空法は国際民間航空条約に準拠する。」という事柄を説明するとき、航空機は国境を超えることができるが、日本上空を通過、また離着陸する他国の民間航空機が安全であることを保証するため条約が必要である。また条約では日本国民が順守することができないから法律がある。よって航空法は、国際民間航空条約に準拠した法律になっている。と小学生でも理解できるレベルのところから説明して納得してもらおうように心がけた。

また航空法の学修に関わる自ら体験した事柄、例えばLCC社設立などの裏話を授業の中で織り交ぜ、学生に興味を持たせるような

授業を心がけた。

- 2) 試験対策の暗記補助として、正解の文章の一部である単語を空欄にした自学自修の補助プリントを配布し、授業中や自修時間に勉強をするように指示をした。これにより、学生が一人でも勉強しやすくなった。
- 3) 理解の遅い学生は、一般的に質問をしないでわからないまま放置する。その他学生の集中力を切らせないようにするため、個別、順番に当てて学生に質問をして答えを求めた。最初は学生が答えを引き出せるようにしつこく誘導したが、その学生は皆の前で答えられなくて恥ずかしいという気持ちを感じさせていた。よって、しつこく答えを聞き出さず、「わからない」と答えたら次の学生を当てるように変えた。

3. 授業改善に向けた提言

授業を構築するにあたり、どのレベルの学生を対象に制作するのかまず決める必要がある。受賞した授業は、学生が全員技能審査に合格できるような授業にするため、理解の遅い学生もわかるようにする必要があった。ティーチングテクニク的には何ら新しい物はない。学生のレベル、理解度を見て授業を進めることは大事だということを再認識した。

4) 担当教員 藤原 大樹

科目名 健康スポーツ教育Ⅱ

1. 授業の概要

本学の教育理念である「体・徳・智」にあるように、身体の健康は人格と知識を備えた人間となるための重要な基盤である。健康スポーツ教育Ⅱにおいては、テニスを通じて健康と体力を維持・向上させると同時に、実社会で必要とされる基本的な社会性を身につけることを目的とした。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み

本授業では、学生が主体的に学修に取り組むことができるよう「プレイヤーズ・セン

タード・コーチング」を導入した。この方法論において教員は学生が自律的に試行錯誤しながらスキルを身につけていくための環境の一部と位置づけられる。そのため手取り足取り細かく指導することを避け、学生をよく観察した上で「何をやろうとしているのか?」「どうすれば改善できると思うか?」などと質問を投げかけることで、学生の考える力を育成し、自己成長につなげるよう意識した。

2) 学生の理解度を高めるための取り組み

学生に記入式のワークブックを配布し、自らのスキル獲得過程を自己観察するよう指導した。ワークブックの構成は「スキルについての予習」「練習」「試合の記録と振り返り」「グループメンバーの情報」であった。また初回と最終回にスキルテスト（サービスとラリー）を実施することで、自分のベースラインに合わせた目標を設定し、上達度合いを把握できるよう工夫した。

3) 学生の質問や発言を促すための取り組み

学生同士のコミュニケーションを促進するため、4~7人程度のグループを基本とし活動を実施した。さらにリーダーシップやフォロワーシップを実際に体験して貰うために、毎週グループリーダーを決め、メンバー全員が順番に活動を主導する役割を担える機会を作った。教員がリーダーに練習テーマや試合形式を伝え、それをリーダーがグループメンバーに伝えることで、学生間のコミュニケーションが活性化され、リーダーシップについての理解度が深まった。

3. 授業改善に向けた提言

学生のレベルを把握した上で、適切な難易度の課題を設定することが重要だと考える。健康スポーツ教育Ⅱでは、テニス経験者と初心者と同じ授業を受けるため、学生のスキルレベルに大きな差が存在する。そのため、経験者と初心者とが同じトレーニングを行う際には、達成目標を複数のレベルで提示することで、自分に適した課題に取り組めるようにし、経験者が飽きてしまったり、初心者が諦めてしまったりすることを防ぐようにしている。

また学修効果を定量的・定性的に把握し、エビデンスに基づいて継続的に授業改善を実施していく必要があると考える。

5) 担当教員 八田 泰三
科目名 有機化学

1. 授業の概要

有機化学は、炭素が織りなす化合物（有機化合物）の構造と性質、反応性を対象とする学問である。膨大な数の有機化合物を構造「官能基」によって約12種類のグループに分類し、本講義ではその中でアルケンとアルキン、芳香族化合物の基本的性質と反応性および立体化学に焦点を絞り、2年前期に開講された基礎有機化学の復習を行いながら、分子の構造的特徴および有機電子論（電子の配置、動きなどから反応を説明する理論）を基にして解説した。さらに、毎回、講義内容の重要ポイントを問題形式にしたワークシート（提出課題）を課し、解き方のヒントについて説明すると共に、レポートの結果は、適宜学生へフィードバックした。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) 有機化学に対する興味・関心を高めるためには、それを学ぶ意義を示す必要があると考え、まず有機化学が世の中に貢献していることを例示した。例えば、新型コロナウイルスに効く可能性がある抗ウイルス薬「アビガン」を紹介し、大半の医薬品が有機化合物であり、それを合成できたのは有機化学の成せる技であることを示した。
- 2) 本講義は教科書を中心としており、その内容の理解度UPを図るために、事前に講義スライドのPDFファイルおよび重要ポイントを問題形式にまとめたワークシートを配布しておき、予習、復習、演習・レポート提出に利用してもらった。

教科書の解説では、重要ポイントを絞り、図式を多く取り入れ視覚的に内容がわかるようスライド作成を工夫すると共に、よりわかりやすい表現で口頭説明するよう心がけた。

授業進度は対面授業と同じ1コマ当り教科

書2~3節（約7ページ）としたところ、板書や口頭質問が無いため平均30分で説明が終了したので、残りの講義時間を講義内容に該当するワークシートの問題解き（演習）に当てた。手書きの解答をPDFファイルにしてレポートとして提出させた後、添削すると共にヒントとコメントを記して返送し、合格するまでこれを繰り返したことから（メール総数800通以上）、結果的に講義と演習をセットで行うことができた。

- 4) 2) で述べたように、対面授業では時間的余裕がなく実施できなかった講義+演習形式の授業の実施、および、レポート提出⇔添削指導を徹底して行うなど、講義ごとの理解度UPに注力した。

3. 授業改善に向けた提言

遠隔授業を始めるまでは、対面授業でない学生に説明が伝わらないと思っていたが、必ずしもそうではないことがわかった。

学生に聞くと、オンデマンド型授業の場合、わからないところがあると繰り返し視聴できることから、内容を理解しながら各自のペースで少しずつ進むことができ、対面授業よりわかりやすいとの感想を得た。

これは対面授業にない優位点であり、本講義においてはオンデマンド型が功を奏した。さらに、講義+演習形式となったことも幸いした。ただし、演習のレポートを出しっぱなしでは意味がない。「添削してヒントを与え合格するまで考えさせる」ことが重要であると感じた。

6) 担当教員 内田 貴久
科目名 建築意匠設計

1. 授業の概要

この講義は中～大規模な建築物を設計する実習講義であり、「○○の資料・情報を展示し、多くの人々に体感してもらうためのミュージアムをデザインする（○○は熊本に関わる偉人や有名なアーティストを自分で選択する）」という課題設定を行っている。

構想から設計へと連なる作業の進め方、様々

なアイデアを具体的な空間に集約していく方法、設計した成果をより効果的に他人に伝えるプレゼンテーション手段などを学ぶことがこの課題の目的であり、加えて、企画内容やコンセプトといったソフトから建築空間を構築する必要がある点も特徴的である。

最終的にはA1サイズ用紙でのプレゼンテーションと建築模型の提出を課している。講義時間内だけで処理できる作業量ではないため、講義時間外で計画的に情報収集・設計作業を行う必要があり、スケジュールコントロール能力も求められる。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) 実社会の設計業務においては、法的条件、構造耐力、対候性、施主要望、建設コストなどが複雑に関係してくるのだが、この設計課題において学生達には、そういった条件に縛られることなく自由な発想で設計を行ってもらっている。その代わりに、単なる自己満足的な形態のデザインに留まることなく、より多くの人に理解される空間利用価値を意識しながら、実用的かつ革新的な空間の設計をするよう学生達に勧めている。
- 2) 与えられた課題条件に従ってただ作業を行い、決められたフォーマットに従った図面を書くだけでは、「自分の意志」で学習しないため知識が記憶に残り難く、最低限の建築知識しか得ることは出来ないと私は考えている。上記のように課題内容に「自分で選択する」内容を盛り込むことで、学生達の積極性と理解度が高くなるよう工夫している。

3. 授業改善に向けた提言

講義に関する内容だけに限らず、建築デザイン一般に関する情報から学生の進路相談や就職情報までも話題にしながら、放課後かなり長い時間を彼らとの会話に費やしている。そんな向上心の高い学生達が長時間大学で快適に学習出来るよう、現在建築製図室の環境も改善を進めている。

多くの知識や経験を得たいと考える意欲的な学生と積極的に会話し、彼らの質問要求にさら

に多くの専門知識を加えて返答できるためには、教師側もより多くの建築情報を得ておく必要がある上、最新の建築情報を絶えず収集することが大事である。そのため講義内容の向上のために、まず私自身の知識と経験の向上が前提となるのを改めて自覚し、引き続き努力を続けていくつもりである。

7) 担当教員 井本 修平

科目名 有機化学Ⅱ

1. 授業の概要

本講義では、有機化学の基礎的概念である、有機化合物の立体構造、性質、反応などに関する基本的事項を習得する。また、有機反応を理解する上で極めて重要な概念である、巻き矢印の使い方を習得する。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) 対面講義の際、薬学分野で有機化学を学ぶ意義を認識できる話題を提供するよう心掛けている。例えば新型コロナ治療薬など新薬の構造を示し、有機化学的観点から考えられることを解説した。
- 2) 学生の理解度を高めるための取り組み
従来は対面講義で実施していた教科書の解説を、オンデマンド動画として収録することで、学生が自分のペースで、かつ何度でも視聴して学習できるように工夫した。この動画を対面講義までに視聴してもらい、対面講義では演習の解説を中心に進める講義方式とした。具体的には、以下の流れに従って講義を受けるよう学生に指導した。

①教科書を流し読みする

【わからない箇所の認識】

②オンデマンド動画を見る

【教科書の解説による理解】

③教科書をしっかり読む

【科学的文章を読み理解】

④重要問題の演習

【本当に理解できていたかの確認】

⑤対面講義での演習解説

【演習解説で深い理解と知識の定着】

気を付けたのは、オンデマンド動画では書画カメラを使って、構造式および反応機構を示す巻き矢印を全て手書きで示した点である。構造式を書き慣れない学生にとっては、手本があることで真似して書くことができ、学習の一助となったようである。

- 3) 対面講義の冒頭に学生を指名し、専門用語の定義等について質問を行うようにした。その際に「動画の中で、私はどう説明しましたか?」と尋ねることで、オンデマンド動画視聴を含めた予習が必須であるという緊張感が生まれ、多くの学生は対面講義前に動画を視聴していたようである。なお、動画を視聴して理解できなかった箇所は、動画のコメント欄に書き込むかメールで質問するように周知した。対面講義の際に質問への回答を行なうことで、授業回ごとに確実なフォローができるよう工夫した。
- 4) 再履修および有機化学が苦手と感じる学生のために、佐藤准教授と連携して様々な対策を実施した。例えば質問対応では、私と佐藤准教授でもどちらでも対応可能とし、私に直接聞きづらいと感じる子でも教員の選択肢がある。また、対面講義では解説しきれない演習問題については、佐藤准教授による任意参加形式の補講にて取り扱って頂いた。

3. 授業改善に向けた提言

令和2年度前期前半は、新型コロナウイルス感染拡大により対面講義が実施できず、担当していた有機化学Ⅲではすべてオンデマンド動画による講義となった。後期科目の有機化学Ⅱでは対面講義が可能となったが、前期の有機化学Ⅲにおけるオンデマンド動画が学生から高評価であった。そこで、このオンデマンド講義動画を上手く活かせる方法はないかと考え、上記講義方式に行き着き、授業アンケートにて良い評価を頂いた。学生の声に耳を傾けながら、より良い授業方法はないかと常に考え、教員が向上心を持つことが授業改善には一番大切ではないだろうかと考えている。

8) 担当教員 マーク ハワース 科目名 English Communication III

1. Class Outline

There are three goals to the English Communication III course:

1. I can understand and discuss simple texts related to my field of study.
2. I can conduct a simple survey and report my findings as both a written report and a poster presentation.
3. I can direct my own learning according to my needs, abilities, and interests.

These objectives are accomplished through various interactive tasks in class using pairs, small-group, and whole-class activities. Students are provided ample opportunities to practice using English by completing tasks which prepare them for an assessment, such as a written report or a poster presentation. The mid-semester assessment is a challenging reading exam which tests students' ability to read a general English text and also a text which is directly related to their major field of study. For the third stated goal of the course students complete the Self-Directed Learning Unit where they are taught how to choose and make use of learning materials that they find on their own, and then they are asked to write reflections on their progress in managing their own learning.

2. Teaching Method

Academic year 2020 proved to be challenging in many ways due to restrictions placed on classes in order to ensure the safety of students during the Covid-19 pandemic. In addition to the number of face-to-face classes being reduced by half, the amount and types of interaction students were allowed in class was quite different than in previous years. The mix of face-to-face, on demand, and fully online classes created a learning environment which was unique for students and teachers alike. There are some basic principles I adhered to which may have contributed to students enjoying the course even

under these challenging circumstances.

First, not only in unusual circumstances like in 2020 but also in normal situations, I think it important to keep things simple. This does not mean that the course should be easy, but rather the tasks that students are asked to complete should be clear and easy to understand. Students are already expending a good deal of mental energy (cognitive load) on parsing the English language while completing tasks, therefore it is important that students have a clear understanding of what is expected of them so they can keep their focus on the input and output of language. Task design and instructions need to be clear and unambiguous. This was especially true for classes that were held on demand. Typically, students were asked to complete a series of online activities through the SILC's Moodle course management platform. During the weekly face-to-face class I would often demonstrate how to complete that week's on demand classwork by providing several examples of the same activity they would be asked to complete for on demand. I think this was helpful for students because there was no confusion as to how to complete the task and they could spend their time focusing on the language within the task.

In addition to designing simple and clear tasks, I think it is important to create an atmosphere in class which is conducive to learning a language. Many of our students have had somewhat negative experiences learning English before entering university. Junior high school and high school English classes are typically focused on mastering discrete grammar points in order to pass entrance exams. Before coming to university most students have not had many opportunities to actually use English as a communicative tool and are understandably uncomfortable when asked to do so. Language is a skill that needs to be practiced, much like karate or playing the piano. Therefore, students need as many opportunities to practice this skill as possible in an environment where the goals are communicative-based as opposed to grammar-based,

One way I try to accomplish this is by emphasizing that students do not need to speak perfect English in class or even write perfect English for written assignments. The goal is always to get your point across, make yourself understood, and ask for help when you don't understand. I almost never provide corrective feedback on grammar mistakes when talking with students or reading comments they have written. Rather, I'll often focus more on the content of what they are saying to show them that their message is being understood. One of the tasks that students are asked to complete is to record a short speech telling a story about something they did during summer vacation. I'll often take note of something interesting that a student said in their recording and either ask them about it in class or write a comment about it in Moodle. I think students appreciate that I am taking an interest in what they have to say rather than constantly correcting their less than perfect English.

Lastly, I try to encourage students to find ways to study English that they actually enjoy. Every student has different strengths and weaknesses, and learns in different ways. Some students enjoy reading books, studying grammar, or practicing English proficiency tests, while others prefer listening to music or watching tv shows. Part of the English Communication III curriculum is a unit on self-directed learning where students are encouraged to try an array of activities and find something they like to do. During this unit I meet with each student individually several times and have a conversation with them about the kinds of activities they are trying and help guide them toward their learning goals. Again, I think this focus on enjoyment rather than striving for perfect English helps to make the process of learning English a more comfortable experience for most learners.

3. Suggestions for Class Improvement

After reflecting on what I wrote above, there are two key points to consider when attempting to improve the quality of classes. First, as much as

possible, try to give individual attention to each student and show some interest in their learning. I understand that this is not feasible in large classes with 40 or more students, but I think if students feel their teacher is genuinely interested in their progress as a learner then they will feel more invested in their own learning. A great way to accomplish this is by briefly meeting with each student at least once during a semester to discuss their learning goals and advise them on how to best achieve those goals. Secondly, I think it is important to convey the idea that mistakes are ok. Our role as teachers is not to constantly point out all the mistakes that students make and admonish them, but rather encourage them to keep trying and learn from their mistakes. Sojo University is a science and technology institute, therefore most of our students are learning practical skills which they will apply in jobs they get after graduating. We should emphasize that practical knowledge is just as important, if not more important, than theoretical knowledge, and the best way to develop that is by learning through doing.

9) 担当教員 大嶋 康裕

科目名 工学・情報系の基礎数理 I

1. 授業の概要

自然界における様々な現象について、その変化を局所的もしくは大域的に解析するための手段を学ぶ微分積分は、理工系学部の初年次に配当されることが多い。本学では、初年次前期に高校と大学の橋渡しを兼ねて1変数の微分積分について学び、後期にその応用と2変数の微分積分および常微分方程式の入門へと学び進めていく。また、入学に至るまでの学生の高校での科目の履修や学習到達度の差異に対応するため、入学直後にプレースメントテストを実施して、複数クラスを開講し、統一教科書を使用しつつも各クラスの実情に合わせて授業の難度調整を行っている。

ここで取り扱うクラスは、工学部建築学科と情報学部情報学科の1年生のうち、学習到達度で5段階分類したうち最も高い50名程度を対象

としている。各回の授業は、平時であれば黒板を用いた知識伝達型の方式で実施する単元説明に大半の時間を割き、残りの時間で問題演習に取り組ませ教員が解説を行う、という構成となる。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

1) 令和2年度については、教室での対面授業ではなく、この科目も他のほとんどの科目と同じくオンデマンド型の遠隔授業を行うため、単元説明を動画で作成し配信することとした。そこで、単に板書をプレゼンテーション用スライドに変更するのではなく、グラフ描画ソフトウェアや数式処理システムを活用した解説を追加した。また単元説明の際に、軌跡がしばらく画面上に残るレーザーポインタ機能を使い、既に表示されている文字をなぞることで「板書がリアルタイムに進んでいるように錯覚する」構成にして、今どこの説明をしているのか分かりやすい動画となるようにした。授業動画で使用したスライドは別途配布していたが、単元解説で必要となる小さい文字列も授業動画上で判別できるように、動画作成前から配信サーバへの掲載まで随所で工夫を行っていた。

2) オンデマンド型の遠隔授業となると、同一時間帯に全学生を参加させた問題演習を実施することは不可能となる。このため、理解度確認のための基礎的事項については、自動採点機能を有効にした確認問題をMicrosoft Forms上に用意して、学生が即時に理解度確認ができるようにした。また、本学の標準LMSであるWebClass上に教員が作成した解答例と、既に複数年度分作成していた過去の授業の説明や問題演習の板書を写真撮影したものを掲載した。これらを適宜参照することを促し、学生自身のノートに行った問題解答と比較させ、単に解答の数値の正解との一致のみで満足してしまわないよう注意して学生を問題演習に取り組ませた。

3. 授業改善に向けた提言

オンデマンド型で提供する授業の準備に業務

時間のほぼ全てを費やしたため、結果的に学生への個別のフィードバックに割く時間が大幅に減ることとなった。この判断の影響を心配したが、大半の学生は提示した資料、動画、課題を上手く活用してくれた。次年度以降は、個別の学生の進捗をLMS上の記録を活用して効果的なフィードバックを行っていきたいと考えている。

10) 担当教員 今井 亮佑

科目名 政治学 I

1. 授業の概要

受賞対象科目である「政治学 I」は、いわゆる旧カリキュラムの「基幹キャリア教育」分野の一科目として、令和3年度前期まで開講していたものである（現行カリキュラムでこの科目に相当するのは、基礎教育課程の「人間と科学・外国語教育」分野の「現代の社会と政治」である）。日本の政治に対する関心を高めてもらうこと、理解を深めてもらうことを目標に、政治の仕組み（選挙制度・議会制度・政策過程など）や政治アクター（政党・政治家・有権者）について、現実の政治の動きと絡めながら講じている。

政治とは正解のない営みであることから、講義の中では、一つの論点に対する複数の視点を提示するよう心掛けている。そして、その複数の視点に立って自分なりに導き出した考えを、根拠とともに文章としてまとめるという課題に取り組んでもらっている。令和2年度に関しては、講義内容をもとに私が設定したテーマに対する自分の「考え」を、300字ないし500字以上でまとめる「リアクションペーパー」を6回、1200字以上でまとめる「レポート」を2回課した。

20歳そこそこの学生にとって政治とは縁遠い、とっつきにくいものであること、上記のように課題が決して軽くはないこと、私が成績評価を厳格に行うという評判が学生の間で広まっていることから、お世辞にも人気科目とは言えないことは自認している。そうした中で栄えある賞をいただけたことは、私にとって大きな驚

きであると同時に、望外の喜びでもあった。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

対面授業からオンデマンド型授業に変えるにあたり、取り上げるテーマを若干絞った他は、取り立てて気をつけたことはない。にもかかわらず受賞の榮譽に浴することができたのは、オンデマンド型授業に変わったことで、対面授業の時から続けてきたことの価値が高まったからではないかと推察する。

先述のような軽いとは言えない課題を課しているのは、「政治学 I」の受講を通じて、自分の「考え」を持った上でそれを文章として表現する能力を身につけてもらいたいと考えているためである。この目的を達成するべく、学期末のレポートを除き、提出された全てのリアクションペーパー／レポートについて、個別にコメントをフィードバックしている。令和2年度後期に関しては、計376本のリアクションペーパー／レポートが提出されたが、その一つ一つに対し、内容面はもちろんのこと、文章の構成や表現の面でも、気になったことを改善方法も含めてフィードバックした。

対面授業の場合、受講生は毎週担当教員と顔を合わせることから、コメントが返ってくることのありがたみをさほど感じないかもしれない。これに対しオンデマンド型授業の場合、受講生が担当教員と顔を合わせることは基本的にはない。そうした中で、受講生と担当教員とを結ぶ唯一と言ってよいチャンネルが、リアクションペーパー／レポートの提出と、それに対するコメントのフィードバックである。このためオンデマンド型授業では、提出物に対するフィードバックが持つ価値が、対面授業の場合に比べ相対的に高いのではないかと考える。対面授業の時から続けてきた、リアクションペーパー／レポートに対する個別のコメントの返信を、オンデマンド型授業の受講生がより高く評価してくれたことが、今回の受賞につながったのではなからうか。

3. 授業改善に向けた提言

授業改善に直接つながる提言ではないが、こ

ここで一言述べさせていただきたいことがある。それは、授業アンケートの各項目の「平均値」が持つ意味についてである。

令和2年度前期の「政治学I」は、「機械・宇宙・応微・生命」と「ナノ・建築・情報」の2クラスに分けて開講した。オンデマンド形式であることから、授業内容及び課題は両クラスで「全く同一」であった。にもかかわらず、両クラスの授業アンケートの結果には大きな差異が見られた。具体的には、「この授業内容の満足度はいかがですか」「この授業内容を理解できましたか」「学生の質問や発言に対して先生の対応はどうでしたか」「授業に使用した教材や宿題は授業内容を理解するのに役立ちましたか」の4項目について、二つのクラスの平均値の間に、両側5%水準で統計的に有意な差があったのである。このことは、たとえ授業内容が全く同じでも（そして、どれだけ質の高いものであったとしても）、それを聞く学生がどのような姿勢で臨むかによって、アンケート結果は大きく変わり得るということを示している。

授業アンケートの結果を見る際、各項目（とくに満足度）の平均値にどうしても目が行きがちである。しかし、受講生如何でアンケートの結果は大きく変わる以上、平均値に一喜一憂する必要はない。平均値よりもむしろ自由記述で寄せられた「建設的な」コメントに注意を払うようにし、それをもとに授業改善を図るのが、授業アンケートの効果的な使い方なのではなかろうか。

5. 結果

今年度は各受賞者からの授業改善のヒントのうち、COVID-19の感染拡大の中で、どのように学生とのコミュニケーションを確立していったかについては、授業形態により固有のものがあると解釈できる。対面授業であれば学生への質問によるものが多く行われ、オンデマンド型授業であれば、レポートなどの添削を丁寧に行う、もしくは自動採点機能などを用いて教員が間接的に介在するフィードバックを行っていた。

表-3 大学院、学部再履修クラスを含めた1634授業の中のアンケート回収率と各授業数

	授業アンケートの回収率				合計
	90%以上	80%以上 90%未満	70%以上 80%未満	70%未満	
R2授業数	36%	21%	12%	31%	100%(n=1634)
R1授業数	49%	22%	10%	19%	100%(n=1349)

各受賞者からの授業改善のヒントとは別に、令和2年度の評価システムがWebにより行われたことによる、アンケート回収率について令和元年度と比較した結果を表-3に示した。その結果、大学院と学部再履修クラスという20名以下の少人数制の講義を合わせると本学では年間1634講（令和元年度は1349講¹⁰⁾の講義が開かれていること、そしてアンケートの回収率が70%以上の講義が、総講義数の69%（令和元年度は81%）であることが分かった。

また、学生による授業アンケートの中で、教員と学生が干渉しあう本質的な部分である、第5項（満足度）、第9項（質問に対する対応）、第13項（熱意）、第15項（講義の進み具合）について20名以上の履修者の授業においてBTA受賞者の評価以上及び評価スコア4未満の履修者数平均を示したものを表-4、同項目について受講者100人以上の受講者を擁する授業についてBTA受賞者の評価と比較を行った結果を表-5に示した。ともに令和元年度の結果¹⁰⁾と比較している。

表-4 20名以上履修した授業における項目評価と履修人数平均

履修人数平均	授業の満足度		質問への対応		教員の熱意		授業の進行度	
	第5項		第9項		第13項		第15項	
	BTA平均以上	4.0未満	BTA平均以上	4.0未満	BTA平均以上	4.0未満	BTA平均以上	4.0未満
R2	45	55	36	68	38	58	41	60
R1	46	60	36	67	40	60	48	63

表-5 受講者100名以上の科目の評価

アンケートスコア平均	授業の満足度		質問への対応		教員の熱意		授業の進行度	
	第5項		第9項		第13項		第15項	
	BTA受賞者	100人以上履修	BTA受賞者	100人以上履修	BTA受賞者	100人以上履修	BTA受賞者	100人以上履修
R2	4.53	4.12	4.57	4.07	4.74	4.26	4.49	4.07
R1	4.50	4.11	4.76	4.19	4.78	4.33	4.52	4.16

6. 考察

遠隔授業の授業形態を選んだBTA受賞者のアンケート回答の多くで触れられていたのが、学生へのフィードバックを行うことの重要性である。

この点を最もよく表したものがアンケートの第9項（質問への対応）であろう。この項目のスコアの高い授業を見ていくと、令和元年度と比較すると対面授業もしくは実験・実習である。例えば一斉に遠隔授業に切り替えた数学系科目は、ほとんどの担当者のスコアが0.4ポイント前後下がった。また、同一の教員が同一のシラバスで実施されている複数学科・クラスでの遠隔授業において、そのスコアに差異が見られるものがある。BTA受賞者のアンケート回答でも指摘されていた通り、個々の教員が授業改善に活かすためには、単年度の平均値だけから解釈するのは適切ではないだろう。スコアの経年変化や、学生の学修の振り返りが記載された「科目の学修到達度レポート」の記載を分析することが必要となるであろう。

謝 辞

共著者であるBTAを受賞された10名の先生方には、限られた期間中、授業への取り組み方に対するアンケート調査にご協力いただき感謝申し上げます。

「学生による授業アンケート」のデータの収集と整理にご尽力いただきました本学教務課の関係各位に感謝いたします。

参考文献

- 1) 緒方広明 著、“オンライン授業への移行に対する国内外の対応と京大の取組”、第1回4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム、2020/3/26 オンライン開催（2020）
https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200326-3_Ogata.pdf（2021年9月30日閲覧）
- 2) 文部科学省、“令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）”、元文科高第1259号、令和2年3月24日（2020）
- 3) 文化庁“授業目的公衆送信補償金制度の概要”、令和2年12月（2020）
https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/pdf/92728101_03.pdf（2021年9月30日閲覧）
- 4) 文化庁著作権課、“事務連絡 新型コロナウイルス感染症対策に伴う学校教育におけるICTを活用した著作物の円滑な利用について”、令和2年3月4日（2020）
- 5) 文化庁、“授業目的公衆送信補償金制度の早期施行について”、令和2年4月24日（2020）
- 6) 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム実行委員会 専門家有志、“データダイエットへの協力のお願い：遠隔授業を主催される先生方へ”、2020年5月7日（2020）
<https://www.nii.ac.jp/event/upload/datadiet.pdf>（2021年9月30日閲覧）
- 7) 麻田直人 編著、“ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して—”、崇城大学紀要、第43巻、235-248（2018）
- 8) 麻田直人 編著、“平成29年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して（第2報）—”、崇城大学紀要、第44巻、211-223（2019）
- 9) 迫口明浩 山路隆文 齊田哲也 佐藤和歌子 編著、“平成30年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して（第3報）—”、崇城大学紀要、第45巻、97-110（2020）
- 10) 長濱一弘 佐藤和歌子 飯田晴彦 山路隆文 編著、“令和元年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して（第4報）—”、崇城大学紀要、第46巻、205-218（2021）

